

日蓮大聖人御書全集

おおいのしょうじにゆうどうごしよ

大井莊司入道御書

新版
1822
〜
1823

おおいのしょうじにゆうどうごしよ

大井莊司入道御書

けんじ

ねん

がつ

さい

おおいのしょうじにゆうどう

建治2年(76) 2月

55歳

大井莊司入道

かきさんぼん

すひとおけ

茎

立

つくし

た

そうら

お

柿三本・酢一桶・くくたち・土筆、給び候い畢わんぬ。

とうど

てんだいさん

やま

りゆうもん

もう

ひやくじよう

たき

唐土に天台山という山に、竜門と申して百丈の滝あり。

たき

ふもと

はる

はじ

のぼ

おお

うおあつ

この滝の麓に、春の初めより、登らんとして多くの魚集

せんまん

いち

のぼ

う

りゆう

うお

りゆう

まれり。千万に一も登ることを得れば竜となる。魚、竜と

な

ねが

たみ

しyouでん

のぞ

ひん

者

成らんと願うこと、民の昇殿を望むがごとく、貧なるもの

たから

もと

ほとけ

な

の財を求むるがごとし。仏に成ることも、またかくのご

とし。

か たき ひやくじよう はや
彼の滝は百丈、早きこと、強兵の天より箭を射徹すよ

はや
り早し。この滝へ魚登らんとすれば、人集まつて羅網をかけ、

つり 垂 ゆみ
釣をたれ、弓をもつて射る。左右の辺に間なし。空には

くまたか わし とび からす よる とら おおかみ きつね たぬき なに あつ
鷗・鷺・鵝・鳥、夜は虎・狼・狐・狸、何となく集ま

く は ほとけ 成
つて食い噬む。仏になるをも、これをもつて知んぬべし。

うじよう しょうじ ろくどう りんね もう われ てんじく
「有情は生死の六道を輪廻す」と申して、我らが天竺に

しし う かんど にほん とら おおかみ やかん
おいて師子と生まれ、漢土・日本において虎・狼・野干と

う てん くまたか わし ち しか へび う かず
生まれ、天には鷗・鷺、地には鹿・蛇と生まれしこと数を

知 しらず。あるいは鷹の前の雉、猫の前の鼠と生まれ、生き

ながら頭こうべをつつきししむらをかまれしこと数かずをしらず。

いっこうあいだみほねしゅみせんたかだいちあつ

一劫が間の身の骨は、須弥山よりも高く、大地よりも厚か

るべし。惜おしき身みなれども、云いうに甲斐かいなく奪うばわれてこそ

そつら

候いけれ。

こんどほけきようみすいのちうば

しかれば、今度、法華経のために身を捨て命をも奪われ

たてまつむりようむすうこうあいだおもでおもきたも

奉れば、無量無数劫の間の思い出なるべしと思ひ切り給

もうきようきよう

うべし。あなかしこ、あなかしこ。またまた申すべし。恐々

きんげん

謹言。

けんじにねんひのえね

建治二年丙子

にちれん

日蓮

かおう

花押

おおいのしょうじにゆうどうどの
大井莊司入道殿